

27) 北部九州と近隣における解剖の歴史あれこれ その2

Secret Histories of Anatomy in Nishi-Nippon (2)

北九州市 ○上瀉口 武
九州歯科大学 小林 繁, 嶋村昭辰

Takeshi Kamigatakuti, *Kitakyushu-City*
Sigeru Kobayashi and Akitatsu Shimamura, *Kyushu Dental College*

北部九州における解剖事績については、長崎においてシーボルト、ポンペのオランダ医学教育の一貫性の中で扱われ、シーボルトの時代は、宗教的、地域的、人種的問題があつて解剖は行なわれず、幕末ポンペの時代になって実施された。ポンペの解剖は安政6(1859)年、長崎西坂刑場で行なはれている。

村上玄水 (1781~1841 年)

中津奥平藩医、村上玄水は文政2(1819)年3月、長浜刑場で行はれた。執刀したのは玄水で、当日の参会者は中津、近隣を含め50余名であつた。現在、肝腎の解剖図は見つかっていない。

後日、玄水の「解剖図説」が見つかり、その中の「解臓記」の解剖用語について見ると、動脈、静脈、腸間膜、乳糜管(ゲールクッ)、臍(大機里爾)など宇田川玄真(榛斎)の「和蘭内景医範提綱」文化2(1805)年刊行の解剖用語が用いられていた。

中津藩は「解体新書」翻訳の中心人物であつた前野良沢がおり、藩主奥平昌高の中津辞書などから「解体新書」との係りが自然と思われるが、各地で苦学中の坪井信道が文化12(1815)年、日田の広瀬淡窓から紹介された中津の辛島成庵宅で「医範提綱」を見て発奮し、文政2年江戸で宇田川玄真に入門している。この文化、文政時代中津藩に、解剖書として「医範提綱」が流布されていたことが分かる。

黒田藩解体事績 (1841 年)

黒田藩では天保12(1841)年、博多大浜で人体解剖が行なわれた。百武万里を盟主として谷仲栄、武谷元立などを主にして、解剖従事者の分担表が残っているが、百武、武谷の肖像画以外に何も残っていない。解剖が周囲住民の誹謗を受けて博多を退去した。後年理解を得られ旧地に戻ったという。その前武谷元立、百武万里、原田種彦らは西洋医

学を学ぶため、文政10(1827)年、吉雄権之助を介して、シーボルトに一年間入門した。

シーボルトの医学教育に解剖学口授があり、中西によると、「五位七症説」の内、五位の解剖学を類別したなかに乳糜道、(腸)間膜、動静之二脈などの解剖用語が見られる。

オランダ語の解剖用語を翻訳するにあたり、沢山のシーボルトの門人の一人、戸塚静海(1799~1876年)に触れると、遠江掛川の人、文政3年江戸で宇田川榛斎に入門、文政7年、榛斎の勧めにより、長崎の吉雄権之助に入塾、シーボルトに学ぶ。11年シーボルト事件起こり、高弟高良斎と共に入牢、シーボルト国外追放の後、推されて塾頭として天保2年まで長崎に留まり、塾生の面倒を見、且つ後始末をする。シーボルトは文政10年には帰国命令を受け、帰国準備のため、講義は出来なかったという話もある。静海は江戸に帰り、天保3年茅場町で開業、天保13年島津斉彬の侍医となり、後年幕府の侍医となる。

市川子堅(泰朴)(1821~1883年)

島原城天守閣資料室に、天保15(1844)年解剖の解体図序と彩色解剖図譜が一連の巻物として展示してある。記録によると市川子堅を盟主として天保14、15両年に解剖を行ない、前年には解剖分担表を翌年には解剖図を残している。両年ともシーボルトの門人賀来佐一郎と睦三郎兄弟が参加している。

解体図序文には、観察之法ハ略医範提綱銅板之図ニ因ル、と由来を書いている。市川子堅は天保13年江戸に行き、戸塚静海に入門、翌14年3月帰国して、同年10月解体を行なったが、一日で終わらなかった。翌15年3月の第2回目の解剖図譜を見ると、乳糜管、動脈、静脈、腸間膜などの用語が見られ、序文の通りである。

この他、近辺各地にいくらかの解剖事績を聞き

たことがあったが，訪ねきれなかった。

いま迄，各地を訪ねて見聞した解剖事績を使用した解剖用語から検討してみた。ここで使用したスライドは次の通り，大分県安岐町三浦梅園旧宅，大洲市大洲市立博物館，島根県津和野町立郷

土館，中津市村上医科史料館，福岡市博物館，島原市教育委員会，長崎県立図書館より夫々収蔵の資料提供を戴きました。参考書籍名については掲載を省略します。